

事務局用

山名氏研究ノ一ト 赤松氏

第 3 号

山名八幡宮	高 井 金 二
追慕三賢	編 集 部
異説・美作後南朝	有 田 明 義
京都「山名町」の町名をめぐって	河 内 将 芳
資料 兵庫・但馬の城と山名氏関係一覧	山 名 年 浩
山名陸奥守氏清公略年譜	宮 田 靖 國
播州木ノ山城・落城の譜	山 名 保
山名城址と山名八幡宮	吉 川 広 昭

末裔登場

山名氏関係名簿

あとがき



平成 4 年 5 月

山名 両 氏 顕 彰 会
赤松



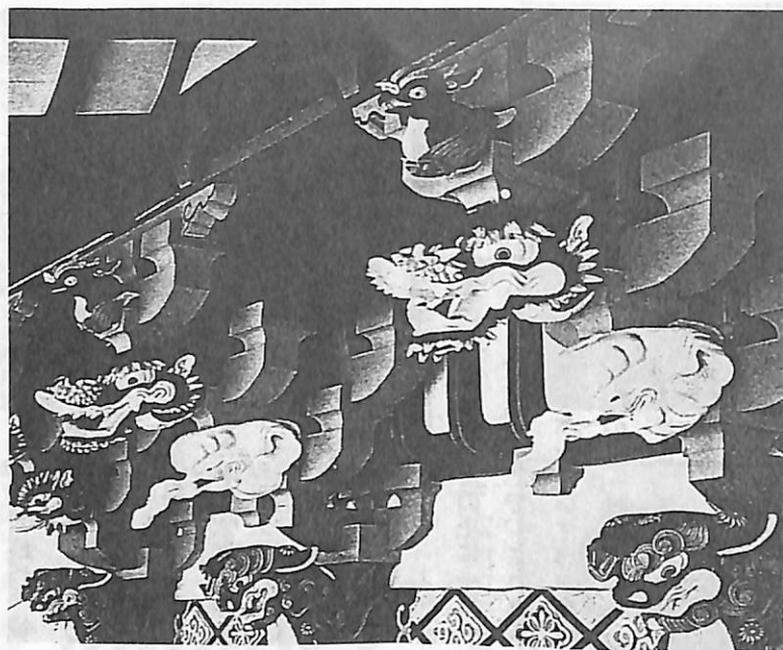
新装なった山名八幡宮御本殿



全国山名氏一族会奉納 神馬の像

山名八幡宮御本殿 極彩色・朱塗、華麗に再現

山名八幡宮宮司 高井 金 二



写真はカラーでありませんので、よくわからないと思いますが、当社本殿は約三〇〇年前に造営され、外部に取りつけられた彫刻は県下はもとより、関東でもその規模の大きさ、彫りの精密さは類をみないもの。

今回は色あせてより約一〇〇年、昨年暮より昔の色を再現しつつ、日本最高の技術を誇る日光小西美術工芸により彩色をほどこし、まさに極彩色の見事な色彩となつて完成しました。

今回の工事にあたり重要部分のとりはずし中に手鉞たばたみの花彫刻の裏面に彫刻師の名前がありありと、筆書きで発見されました。

「明和六年六月十四日 東上州勢田郡上田澤村 関口文治郎」と、今から二二五年前の事で、数年かけて

幸せな人生をめざして

全国山名氏一族会

理事長 山名 文雄

全国山名氏一族会が発足されてから、毎年、山名氏縁の方々と親しく、楽しくお会いする事が出来る様になりました。又山名氏一族縁の地を見聞させて頂ける様にもなりました。そして、会報や研究ノートや山名家譜等を発刊して頂きましたので、我々も山名氏一族の先祖の方々の御遺徳をより深く認識する事が出来る様になりました。

色々の歴史等を見聞する度に、大きな業績を上げる為には、より多くの人々が協力し合い、力一杯頑張り続けることが、最も大切な事であることを感じさせられます。

我々一族会も、楽しい雰囲気の中で親しく御付き合いの輪を拡げながら、世の為、人の為になり、皆んなに心から悦んで頂ける良い仕事を元氣一杯貫き通して行けるグループとして、頑張り続けて行きたいと思えます。

過去を振り返って、その良さを身に付けると共に、その良さ

を生かして新しい時代に対応した方策を創造し、地域社会の人々からも心から悦んで頂ける山名一族でありたいと思つて居ります。

人間は誰もが一番望んでいることは何でしょうか、それは本当に幸せな人生を得ることであると思えます。

幸せな人生とは、物やお金が沢山あることではありません。心から悦べる心身共に豊かな人生であると思えます。

然し、人生悲喜こももと言われる様に、良い事ばかりは続きませんが、人生に於て「運とは運ぶものなり」と言われる様に、良い運を得る為には、自らが良い運を運ぶ努力を重ねなければなりません。

「大きな成果は、不断の努力の積み重ねから」とも言われております。正しい事を積極的に実行し、悪い事はしない様にする良い習慣づけをしてゆけば、必ず神様にも認めて頂き、良き裁定をして頂いて、幸せな人生を得られると思えます。

「苦勞と言う種を蒔き、努力と言う肥料を注げば、満足と言う立派な花が咲く。」とも言われて居ります。

皆んなで、立派な花を咲かせる幸せな人生が得られる、立派な山名氏一族会を目指して、一層頑張り続けて行きましょう。

円心三尊像保存会入会のお願い

兵庫県指定文化財三尊像保存会

発起人代表河野原自治会長 河野千治

日本に残る一大史実である建武の中興が、NHK大河ドラマ「太平記」を契機として大きく見直されようとしています。更に赤松円心と関わりの深い白旗城跡が文化史跡として国の指定を受けるのも目前の昨今であります。

当河野原部落には、赤松家と最も縁の深い宝林寺があり、その境内には円心・則祐・雪村友梅の三尊像が、数百年の歴史を閲しながら安置され、近郷の歴史的シンボルとして大きな地域の誇りとなつて参りました。しかしながら、過去の長い間円心堂の維持管理については当河野原部落によつて修理等応急の処置しかならず、建物・像の傷みが相当進んでいる現状であります。

昨今では広く県外からの見学者もありませんが、県の指定も受けている歴史的に価値の高い文化財の現状について何等かの対策は無いものかとの不満の声も耳にします。この際、当河野原部落住民を中心にして保存会を結成し、広く入会を募り、地域の、又赤松家縁の方々の歴史的シンボルとして、更には広く文化財としての意識の高揚を図り、何等かの再建の運動を起こしたいと思っております。何卒以上の趣旨にご賛同頂き、当会の入会をお願いする次第であります。

入会申込みは 郵便番号 六七八・一一一

兵庫県赤穂郡上郡河野原三二六

河野原自治会長 河野千治

☎〇七九一五・二二七三〇 までお願いします。

異説・美作後南朝

有 田 明 義

(上郡町ふるさと創生推進委員)

將軍宮 良懷親王

世々になお 恵みをかけよ我が国の

ひかりにたのむ あぶの神垣

元禄二年巳八月

説、さらにはフィクッションも余りにも多すぎて、いったい、いづれが真説、史実かは解らず、理解に苦しむ場合が多いが、それだけに、たちこめた霧の彼方には秘められたロマンもあるのかも知れない。

〔一〕 南北朝合一

中世、赤松氏と深いかかわりをもつ南北朝は日本歴史

史の上でも特異な存在である。特に後南朝となると、

余りにもなじみが薄く、一般の歴史とはかけはなれた

謎の存在であり、霧のベールに包まれた部分が多く、

解明も困難である。たしかに後南朝は普通の歴史では

登場することも少ないし、たまに登場しても異説、俗

歴史の上では普通、南朝、後南朝の区別は建武三年

(一三三六) 一二月、後醍醐天皇が三種の神器を奉じ

て、吉野に潜幸。吉水院を仮の行宮所とし、吉野朝廷

の樹立宣言されてから、後村上天皇長慶天皇を経て、

次には後亀山天皇の南北朝合一までを南朝、その後を

後南朝と呼ぶ。この後南朝誕生のいきさつは今更、述

べるまでもないので簡単に記すと、次の通りである。

元中九年(一三九二)一〇月、南北朝双方は様々な和

平交渉を繰り返しながらも、次の条件に合意し、南北朝合一は成った。

一、後龜山天皇は三種の神器を京都に戻すことに合意し、後小松天皇に対して「讓国」の儀式で、これを授けること。

一、将来に於ける皇位は大覚寺統、持明院統の迭立であること。

一、諸国の国衙領はことごとく大覚寺統の管轄であること。

一、諸国に散在する長講堂領はすべて持明院統の管轄であること。

これで見ると、北朝側が相当に譲歩していることが理解できる。たとえば讓国の儀式云々では北朝側が南朝側を正統の皇位と認めた上で、北朝の後小松天皇に讓位することになり、それまでの北朝皇統は誤りであったことを認めることになる。三番、四番の皇室の所領問題はそれぞれ、各地とも守護、地頭が実権をにぎっているので領有云々は、単に名目にすぎない。

そこで問題は二番目の条件である。南北双方の皇統迭立、これはすでに「文保の和談」の主要条件であったが、現実には実施困難であることはすでに経験済みである。にもかかわらず、再度、提示しなければならぬのは南北双方がこの問題には重大関心を寄せていることに外ならない。特に北朝側は名を捨てても実をとる作戦、すなわち、南朝が保持する三種神器奪回が最大の目的であり、北朝側は見事に功を奏したといえる。

古来より国内の内乱勃発の主要原因は皇位繼承を巡る勢力争いに起因することが多い。またしても、この問題の再燃である。双方、円満にこの条件が履行できれば、何も問題は起こらなかつた。今回の場合も北朝側が三種神器を取り上げれば、こちらのものとばかりに和合条件を完全無視、条件不履行が南朝側を追いつめ、後南朝誕生となったのである。

歴史は人間のあくなき、征服欲のなかに生まれ、様々な人間模様を織りなしながら、日本歴史が綴られてきた。南北朝の場合は特に顕著な例である。

〔二〕 三種の神器

朝廷、幕府の政治権力が深い確執を示した三種の神器とは、いうまでもなく、我が国の皇位継承の象徴として、代々の朝廷に引き継がれてきた天皇家のシンボルでもある。三種の神器が通史に登場するのは寿永四年（一一八五）三月、源平合戦に敗れた平家が壇の浦に追いつめられ、三種の神器もろとも、八才の幼帝安德天皇が二位尼に抱かれ、御座船より海中に入水、哀れ、平家は西海の果てに滅亡した源平合戦に登場するのが最初である。この時、三種の神器は源氏の武士によつて海中より回収されるが、剣は発見されず、後には伊勢神宮の神剣を三種の神器に用いたという。

次には建武三年（一一三六）一二月、三種の神器と共に後醍醐天皇が吉野に潜幸、その後、南朝に保持され、元中九年（一一三九二）の南北朝合一では三種の神器の授受が第一条件とされるなど、歴史の上での天皇家を巡る政争には三種の神器は必ず登場している。だが、歴史の節目に登場するとはいうものの、一般の目

には触れることのないのが三種の神器であるが、時代が変わり、「主権在民」の世の中になると有難いことに私たちは三種の神器をみる事ができた。昭和天皇御崩御の後、新しく迎えた平成時代、今上天皇のご即位式「踐祚の儀式」の模様がテレビで中継され、全国に放映された。その時、侍従が捧げもつ三種の神器が史上はじめて、国民の目にふれたのである。

三種の神器が天皇家の象徴となつたのは、いつ頃かは正確には判らないが、崇神天皇の頃、大和平定を終えた天皇が八咫鏡、八坂瓊曲玉、天叢剣を天皇権力の象徴として三種の神器に定められたといわれている。

八咫鏡の起源は天照大神が皇孫を召して「この鏡を見ることは我を見る如くとせよ」と与えられたという。また八坂瓊曲玉は崇神天皇が天明主神に命じて造らせ、王家の神璽として用いられたことにはじまるという。

次には天叢剣は景行天皇から日本武尊が賜つたが後には天皇家の守護剣として三種神器になつたという。熱田神宮の御神剣草薙剣と同種である。もちろん、これ

らの由来は神話からの創作であることは間違いない。

鏡、劍、玉の形態から専門家の推定では古代王朝に朝鮮または中国から献上されたものか、朝鮮半島を経由して渡来した鏡、劍等を見本にして、我が国で製作されたものかは、定かではないともいう。その後、再三の罹災により焼失、その都度、新しく造り直したことは十分に考えられる。特に奈良、京都は古代王朝の所在地であり、政権をめぐる様々の騒乱の中心地として再三、兵火をこうむり、皇居は、その都度に焼失しただろう。当然、三種の神器も罹災したことはいうまでもない。

聞くところによると、明治初年、明治天皇は当時の帝室技芸員宮本某氏に命じて、熱田神宮の神劍草薙劍を見本として、三種の神器の御宝劍を新しく造り替えられたという。それはともかくとして、三種の神器は皇位継承の象徴だけではなく、常に日本歴史の変転の中に存在し、時代を回転させる歯車の要の役割を占めていたのではないだろうか。

(三) 悲運の小倉宮

秘められた後南朝の歴史とはいいながらも、後南朝のなかで最も華々しい活躍を見せるのが小倉宮である。ところが活躍とは、うらはらに出自となると史書によって、様々に伝えられ、初代、次代、三代と複雑である。それ故にこそ、後南朝を代表する程の有名人であり、後南朝の歴史にはふさわしい人物かも知れない。

最も一般的な小倉宮の史実としては後龜山天皇の第三皇子として建徳元年（一三六九）誕生、立太子後、良泰親王といわれている。父後龜山天皇と共に南北合一後、大覚寺に入れ、その後、後南朝の中心人物として活躍、この史実には間違いがないだろう。小倉宮は桓敦宮、上野宮とも呼ばれ、応永二九年（一四二二）死去されているので、伝えられる程、派手な活躍をする期間がないのではなからうか。

次に小倉宮の弟宮宣仁親王も小倉宮とよぶ。この宮には天基王、円満王、空因王の三王があり、さらに空因王には北山宮、河野宮の二皇子があるが、この二皇

子が赤松氏の残党の襲撃を受け、奥吉野で悲愴な最後を遂げ、後には神器も奪取されたというのが通説である。また、小倉宮は後龜山天皇の皇子ではなく、皇孫にあたり、聖勝（または聖承）ともいわれ、紀州で挙兵するが、幕府軍に討たれて死去し、全くの別人との説もある。

ところが嘉吉三年（一四四四）京都御所に乱入、三種の神器を奪取したのも小倉宮であり、奪取は成功したが幕府軍に追われ、比叡山の根本中堂で自害したともいわれている。だが、自害したはずの小倉宮は嘉吉の変より二〇年前に伊勢の国司、北畠満雅をたより、北畠満雅と共に正長元年（一四二二）八月、兵を挙げたが、幕府軍に敗れて投降、嵯峨に幽居、嘉吉二年（一四四三）五月に死去したという。かりに、この時、生存していても年齢的に相当、高齢になり、御所乱入はどうてい考えられない。また「赤穂市史」には伝承として、小倉宮が坂越に逃れ、山名軍の追撃を知り、もはや逃れるすべもなしと海中に投身、坂越が終焉の

地であったと記されている。このような伝承は全国各地に多いだろう。

次に小倉宮が伊勢で北畠氏と共に挙兵したことは史的実的にも確実であるので、小倉宮の比叡山での自害説は年代的にも矛盾があり、その時の主人公は誰であるのか、真実は判らない。また一説には、皇居に乱入したのは、後鳥羽上皇の落胤源尊秀であり、南朝とは全くかわりのない人物であったともいわれている。

このように後南朝の中心人物として、多彩な活躍を遂げる小倉宮については、様々な説があり、真相は霧の彼方である。いずれにしても小倉宮は悲劇的な最後を遂げるので、判官びいきの日本人の感覚には、悲運の皇子として、虚像、偶像が次々生まれてきたものだろう。だが、「南北朝の合一」の和平条件を幕府側が誠実に遂行していれば、間違いなく、次期天皇の位についた人であり、条件の不履行によって、その後、歩まれた人生は波乱万丈に富み、激動と悲運につつまれた道であったことはたしかである。

〔四〕 美作後南朝と八咫鏡

後南朝の全貌の解明は普通でも困難であるのに、さらに複雑にしたのが、美作後南朝の登場である。たとえば、赤松氏の残党が襲撃したのは、大和の吉野ではなく、美作の吉野であり、それも赤松から距離的にも近い、岡山県英田郡作東町の周辺とすると、赤松氏後半の歴史は大きく、書き換えなければならなくなる。

ところが、この美作後南朝の歴史こそ、真実の歴史であり、伝えられるような奈良県吉野郡川上村を舞台にした後南朝の歴史は全くの誤りであり、美作後南朝こそ、正しい日本歴史であるという説が登場した。津山市の美作後南朝正史研究会の人々により、昭和三五年二月に発表され、各地に大センセーションを巻き起こしたのである。

この問題は美作後南朝に伝わる三種の神器の真偽論争から、所有権にまで発展し、果ては、民事訴訟にまで持ち込まれ、岡山、山口両県の県知事まで動員、裁判を通して決着を付けることになり、現在の神器争奪

合戦となり、歴史裁判としても注目を集めたが、裁判所側は、歴史は裁判になじまず、この問題を棚上げにし、単に物件の譲渡問題として審理を進め、所有権は従来通りと認め、下関の赤間神社の勝訴となった。

昭和三三年七月、美作町天皇谷から発掘した神器は、専門家の調査の結果、「藤原時代初期の造作であり、日本最古の和鏡である」との鑑定がでた。美作町で発掘した和鏡は奈良時代から、平安時代にかけて皇位継承のシンボルとして、天皇家に伝えられた三種の神器のひとつ、八咫鏡であり、『大日本史卷四十一』に記述されている「神鏡災に罹り燼余を収む」の通りに、第六二代村上天皇の天徳年間、第六六代一条天皇の寛弘年間、第六九代後朱雀天皇の長久年間の三回の内裏の火災に遭いながらも、原型は損なわれることなく、三分の一が焼失したのみの神鏡である。

その後、「燼余八咫鏡」命名され、天皇家の象徴、三種の神器として、代々の天皇に伝えられた。この真正銘の三種の神器が岡山県と、兵庫県の県境に近い

美作町土居から、発掘されたことは、美作後南朝説を掲げる人たちを喜ばせ、大いに力づけた。それまでの単なる史話、伝説、伝承のみではなく、これ程、確實な物的証拠はない。だが、肝心の神鏡は裁判の結果、赤間神社の所有に帰している。赤間神社側の主張は壇の浦の合戦に平家が海中に投じた三種の神器であるので、安徳天皇を祭る赤間神社に奉安するのが正当であり、所有権も神社側にあるとする理論、この説を裁判所が正式に認めたのである。その鏡が壇ノ浦より美作に至り、後年、美作より出土、さらに美作より、赤間神社に至ったことは複雑な経路によるので省略するが、いずれにしても本物の八咫鏡であることは間違いなく、現在は赤間神社の秘宝として、明確にその由来を記し、安置されているのである。

〔五〕 美作朝廷のはじまり

美作後南朝とは今から五三〇年前、嘉吉三年（一四四三）より元禄一〇年（一六九八）までの約二五〇年間にわたって、営まれてきた美作における後南朝皇統

である。後南朝と美作との関連は南北朝時代、美作国守護職であった山名修理大夫教清と後龜山天皇の皇子小倉宮良親王のふたりが南朝再興を目指して、気脈を通じ合い、深いかかわりをもったことに起因する。南北朝騒乱の最中、山名教清は小倉宮の第四皇子、空因宮尊良親王を隠棲地甲賀にも危険が迫ったので、嘉吉二年（一四四二）九月、教清の領国、美作国植月荘（現在の岡山県英田郡美作町）に植月御所を建て、空因宮とふたりの皇子を迎えて、美作に後南朝の朝廷をつくったのはじまる。そして空因宮の第一皇子、尊秀親王が美作国植月御所で踐祚、南朝正統初代高福天皇となった。

高福天皇から九代良懷親王に至るまで天皇行宮、植月御所が営まれていた。普通の日本歴史では後南朝は大和の吉野で断絶したことになり、その後の歴史には登場していない。美作の場合は初代高福天皇から、八代高仁天皇にいたるまで、代々の天皇は植月御所で踐祚、三種の神器も代々の天皇に引き継がれてきた。も

ちろん、天皇家に臣従する公家、廷臣もあり、その後裔も美作に在住している。これらの方の家には、天皇家にかかわる古文書をはじめ、美作後南朝の存在を物語る多くの貴重な歴史的史料が保存されて現在に伝えられている。尚、歴代の天皇の御陵は今も丁寧に地元で祀られている。

これらの歴史的証拠史料もあるのに、何故、歴代の朝廷や、幕府その他の権力者も現在まで、美作後南朝の存在を無視、さらには、それ以上に存在そのものを抹殺しようとしてきたのだろうか。単純ではあるが、このような素朴な疑問も生まれてくる。現在の天皇家を中心にした、皇室の存在にもかかわらず重大問題が、皇国史観の中に秘められ、あえて、歴史学者も、この問題にはふれず、さけてきたのかも知れない。

次に大和後南朝と美作後南朝を比較してみると、類似点が多いのにまず、驚かされる。たとえば、双方の地名である。大和と同じく美作にも吉野郡が存在し、吉野川が流れている。さらには川上村まで存在する。

大和の場合は一宮尊秀親王の御所は地名をとり、北山宮と呼ばれたが、美作にも北山村があり、同じく北山宮である。二宮も同様であり、河野村がある。そして二宮を河野宮と呼んでいた。尚、赤松氏の残党が北山宮を殺害、神器を略奪し、郷民の追撃を受け、ほとんどが討ち死にした伯母ヶ峰は美作にも存在し、地元では赤松氏の残党を追撃した古戦場と、今も伝えられている。このように、地名ひとつにしても、全く同じであるので、これでは、どちらが本当の後南朝か判らず、迷ってしまう。

さらに登場人物となると、当然ながら同じであるが、違いは、大和では自天親王が赤松氏の残党の襲撃を受けて落命、その後は皇統としての後継者が絶え、「御朝拜」の形式的な伝統が「筋目衆」によって、引き継がれてきたが、美作の場合は、皇統は江戸時代までつづいている。そして美作の人々は美作こそ、本物の後南朝であり、従来の大和説は誤りであるので、正しい歴史的事実にもとづいた、日本歴史に訂正しなければ

ならないと、声を大にして主張している。

〔六〕 美作朝廷のおわり

応仁元年（一四六七）に勃発した応仁の乱も一年目には、ようやく戦火も下火になって、平和の機運が訪れはじめた。植月御所の南朝の後胤も山名軍に主将として、推戴されて、再三、戦場にのぞみ、戦火の中をぐぐり抜けてきたが、戦後は少範圍であるが、皇位を維持できるだけの状態を保ち、平和がよみがえった。もちろん、山名氏の庇護によるものであることはいうまでもない。ところが、山名氏の勢力が衰えはじめた天文年間になると、出雲の尼子勢力が美作に浸透、各地で合戦がおこなわれ、山名氏が敗退、植月御所が南朝後胤であることを尼子氏が知ると、その後は御所を別格あつかいにして処遇した。

時代がかわり、群雄割拠の戦国末期の動乱期には美作も支配者が次々に変わり、毛利、浦上両氏の領有になると、植月御所の皇統待遇も廃され、美作地方の一豪族並となった。山名氏の庇護による植月御所の最盛

期の領有地は八万五〇〇〇石程度であったといわれるが、その後、新勢力に侵食され、近世初頭には御所の勢力の及ぶ範圍は、わずかに四五〇〇〇石程度と減少した。それでも土地の豪族、有元、安東、新免氏などの支援をうけ、面目と格式を保っていた。

慶長八年（一六〇二）近世を迎えた美作は新しく、津山一八万六五〇〇石の藩主として森三位左近衛中将美作守忠政が津山城に入城した。美作入封に際して、新領主となった忠政と、美作豪族との間に確執があったが、植月御所を優遇することと和解が成立。森家はその後植月御所に対しては、特別な待遇を与えたので、衰退していた植月御所も往年の威勢を取り戻すことができた。また、藩主森忠政は京都においても、南朝再興に奔走、成果が挙がる寸前に、不慮の死を遂げた。反対派による謀殺であったともいわれている。大きな後盾を失った植月御所は再び、衰退の道をたどりはじめた。加えて、この頃になると幕府の圧迫も強まってきた。これを受けて、津山藩でも以前は優遇して

いた植月御所にたいして、微妙な変化が見られるようになった。藩主の交替後は完全に態度が豹変、様々な弾圧さえ、加えられるようになる。御所に仕えてきた美作の豪族たちと津山藩との間は險悪な機運が広まっていた。多分、この頃だろう。先述の八咫鏡が幕府の没収から、逃れるために、美作町天皇谷の山中奥深くに埋藏された。

元禄一〇年（一六九七）津山藩に大きな悲運が訪れた。四代藩主長政の急死、つづいて後継者の森式部が入府途中の桑名で騒動をおこし、津山藩一八万六五〇〇石は開易、忠政以来の名門、森家は四代を経て、津山での歴史の頁を綴じ終えた。

さらに幕府は、この時、良懷親王から親王号を取り上げ、次には植月御所の南朝皇統領をも没収したのであった。悲運は重なるもので、宝永六年（一七〇九）一月、美作皇統最後の親王となった良懷親王が吉野川を船で南下中、船が転覆、親王は不慮の死を遂げた。一説には南朝皇統の断絶を図るため、幕府の命をうけ

た隠密が船が転覆するように細工したともいわれている。良懷親王には一子良明王があったが、身の危険を感じて鳥取近くの人形峠付近に隠棲、完全に庶民の中に埋没してしまつたという。

我が国の天皇家の皇統につながらながらも、時代に受け入れられることなく、悲運にも野の果てに、散つた多くの皇胤たちの胸中には、延元四年（一三三九）八月、吉野の行宮において、崩御された後醍醐天皇が臨終にさいして、強く述べられた言葉「玉骨は、たとい、南山の苔に埋まるとも、魂魄は常に、北闕の天を望まんとする」との悲願に燃え、南朝再興に一縷の望みをたくしながらも夢やぶれ、悲願も及ばず、ついには美作の地の露と果てた。美作植月御所を仮行宮にして天皇家を創設した初代高福天皇以来二六〇年間つづいた美作後南朝の歴史に再び、陽光がさすことなく、永遠に歴史の表舞台から消え去つたのである。美作後南朝の悲運の慟哭は美作の地に絶えることなく、永遠の歴史とともに。

京都「山名町」の町名をめぐって

— 中世から近世にかけての京都町名の一変遷 —

河 内 将 芳

一

周知のように、京都で現在でも使用されている町名の中には、その淵源をはるか中世にまで遡ることができ、きるものが少なくない。現、上京区堀川通上立売下ル

の「山名町」もそのひとつであるが、小稿では、この「山名町」に焦点を絞りつつ、中世から近世にかけての京都における町名変遷の一模様を具体的な史料によって跡付けてみようと思う。ちなみに、この分野での系統だった先行研究としては、「日本歴史地名体系第二七巻 京都市の地名」(平凡社、一九七九年)「京都市町名変遷史 2 西陣周辺(上京区)」(京都市町名変遷史研究所、一九八八年)が著名であるが、殊にここではこれらの

研究の中で「山名町」に関して看過された諸史料をできるだけ取り上げてゆくことも心掛けようと思う。

二

そもそも「山名町」の町名の由来は、当地がかつて室町期の有力守護大名山名氏の屋敷地の一部であったためであると漠然といわれてきたが、具体的に文字として残された史料でこのことを示すものといえ、

「雍州府志」八(貞享元年・一六八四年刊)(一)の次の記事が最も古い部類に入ると思われる。

○山名辻子 在船橋西山名家代々之宅地也、船橋川

西面石壁則山名宗全時所築也、

右からは、まず、貞享元年時点で「山名辻子」と呼ばれる当地が、かつて「山名家代々之宅地」であったと考えられていたことが読取れる。また、この「山名辻子」付近の「船橋川(堀川)西面」には、「山名宗全」の時に築かれたとされる「石壁」が、近世初期に至っても残っていたようである。この「石壁」については、『京羽二重織留』巻之二(元禄二年・一六八九年刊)⁽²⁾にも記載されているが、残念ながら、現在の部分の堀川が埋立てられ暗渠となつているため確認できるよすがもない。

ところで、右の史料では留意すべき点がある。それは、貞享元年時点において当地が「山名町」という町名ではなく、「山名辻子」と呼ばれていた事実である。この点については、『日本歴史地名体系第二七巻 京都市の地名』『京都市町名変遷史 2 西陣周辺(上京区)』共に、寛永一四年(一六三七)付『洛中絵図』⁽³⁾に「やまなノずし」、またさかのぼること元龜三年(一五七二)付「上下京御膳方御月賄米寄帳」⁽⁴⁾に「山

名殿町」とあることに言及しており、当町名が必ずしも一定していなかった模様が窺われる。しかし、この一定しない状況は、以後もかなりの間、続いていたことが次の史料から看取できる。

▲北舟橋町 ③山名町

又山名辻子ともいふ、此所古足利義政公の執権山名宗全居住の旧地也、故に号す、

右は、『京町鑑』(宝暦一二年・一七六二年刊)⁽⁵⁾

の記事であるが、これによりこの当時においても当地が「山名町」、「又山名辻子とも」いわれていたことが読取れるのである。ただし、現在のところ、当地が近世のいつ頃に現町名「山名町」に一定したかは、史料上、確定するには至っていない。

三

さて、このように近世において「山名辻子」とも「山名町」とも呼ばれた当地は、いつ頃からその町名生成の基底をなす「町」化を始めたのであろうか。この点

で参考となる史料が次である。

一、山名殿前東類 小原 此在所御中御酒依進上申

御免、殊当時主替之由候、

これは、応仁の乱後まもない明応期（一四九二—一五〇一年）頃のものと考えられている「酒倉味噌役免除在所注文」⁽⁶⁾の一部である。文中の「類」は「つら」と読み、中世京都で独特に使用された、道に面した「側」を意味する文言であり⁽⁷⁾、したがって、右からは、「山名殿」（付論、参照）の前の東側に「小原」という酒屋乃至は味噌屋という当時の富商が所在していたことが読取れ、当地付近の「町」化の片鱗、合わせて当地の町名の端緒が窺われるものといえよう。

そして、この七〇年後、織田政権下の元龜三年に先述のように「山名殿町」の名が現われるのである。この「山名殿町」は、「上下京御膳方御月賄米寄帳」により「川ヨリ西組」という町組に所属していたことが看取でき、これにより、当地が中世末京都の中でも比較的古い「町」としてこの時すでに成立していたこと

が了解できるのである。

それでは、この「山名殿町」には、いかなる人々が居住していたのであろうか。この点を窺うことのできる史料が、近年発見された。次がそれである。

山名殿辻子

本國寺戒善院 百文 リ 宗悦

(中略)

妙顯寺教藏坊 貳百文 ト 小五郎殿

(中略)

妙蓮寺高乗坊 五百文 ヌ 与次郎殿

妙伝寺幸林坊 三百文 ヲ 五郎次郎殿

(中略)

本満寺一位殿 老貫文 ハ 三郎左衛門尉殿

(中略)

本隆寺本証坊 貳百文 ハ 孫五郎殿

(中略)

本禪寺真成坊 百文 カ 与三殿

(中略)

以上七貫百文 内貳貫五百文 且過上正立立替

これは、織田政権下の天正四年（一五七六）に法華宗・日蓮宗の京都十六本山が洛中で勧進を行なった際の記録（8）の一部である。右により、当地に本國寺・妙顯寺・妙蓮寺・妙伝寺・本満寺・本隆寺・本禪寺の檀那であった富裕な住民が多数居住していたことが読取れるが、わけても注目すべきは、その町名が「山名殿辻子」である事実である。というのも、先の「山名殿町」の町名の存在からは元龜三年において当地が「町」化していたことは確認できても、その形態がいかなるものであったかについては確定できなかつたからである。しかし、この「山名殿辻子」の町名の存在によって、当地が天正四年にはすでに東西に貫かれた「辻子」（9）を中心とした、現況に近い「町」の形態をもっていたことが初めて確認できたのである。

四

ところで、現、「山名町」には、近世後期を初見とす

る町有の多数の古文書・古記録が伝来している。（10）

しかし、残念ながら、それらの中には中世及び近世初頭の当地に関するものや町名にまつわる史料は残されていらない。したがって、今のところ、現地に残された史料から近世におけるその町名変遷を探ることは難しい。しかし、仮に史料は残されてはいたとしても、はるか中世、当地に屋敷を構えた守護大名山名氏の名字そのものがその町名として現代に至るまで伝えられているというこの事実の背後には、この名字と中近世における当地の住民、ひいては京都の住民にとって決して忘れ去ることのできない何らかの記憶との深い結び付きがあったことだけは間違いないようである。（11）

（付論）

次の地図（地図一）は、先述した寛永一四年付「洛中絵図」を参考にして近世初期の当地付近を筆者が描き写したものである。周知のように、寛永一四年付

「洛中絵図」は、京都大工頭中井家による近世初期京

都の最も精緻な地図として著名であるが、ここからいくつか興味深いことが窺われるので付すことにする。

その第一は、「やまなノずし」が、猪熊通と堀川という通と川を連結させた「辻子」であったことである。ちなみに、この地図でみる限り、この部分の堀川西岸に通（とおり）は存在しない。また、京都での「辻子」が通と通を貫く道である場合が一般であったことからすれば、一種奇異なものといえようが、堀川が中近世京都における水上交通の動脈であった事実からすれば、交通の至便から必要であったのかもしれない。そして、この点からすれば、先にみた「小原」という富商の在所は、堀川を隔てた東側の「北舟はし町」であったものと思われる。

ついで第二は、山名屋敷の規模についてである。これについての明証は、現在のところないが、例えば、次の応仁の乱以前の京都を描いた古地図をもとに作成されたとされる「中昔京師地図」（宝暦三年・一七五三

年刊）⁽¹²⁾（地図二）、ただし筆者が必要部分だけを描き写した）によれば、南北は不明なものの東は堀川、西は猪熊通に至る規模ということになる。

しかし、「山城名勝志」巻之二（宝永二年・一七〇五年刊）⁽¹³⁾の中に「○山名宗全館按今五辻通大宮東有山名辻子此所敷」とみえ、西が猪熊通よりさらに一本西の大宮通に至るまでであった可能性も考えられる。しかし、これも確証に欠けるので、ここではひとまず「中昔京師地図」に従い、先の地図に記載される間数を参考にするならば、山名屋敷は東西に「七拾五間半」前後の規模であったことが想定できるのである。また、この近世初期の堀川西岸の状況が、中世の状況の延長線上であると考えることが許されるならば、山名屋敷は、堀川をまさに天然の堀とした「構」であったと考えられる。そして、このように考えることによって、先述の「石壁」の存在の意味も明瞭となるのであり、この点からいえば、山名屋敷は室町期の洛中に所在する武家屋敷

の中でも極めて軍事的な観点を加味した構造であったともいえよう。

ところで、この山名屋敷はいつまで存在していたのであろうか。この点について、『京都坊目誌』上京第四学区之部（大正四年・一九一五年刊）⁽¹⁴⁾に「山名宗全ノ館址、（中略）此館は応仁元年五月二十六日

（中略）軍中火を失い為に類焼す。尋ねて再造せしも宗全没し。西軍解散と共に廃す」とあるが、史料の質からいって当然このまま信用する訳にはいかない。しかし、現存する『洛中洛外図』⁽¹⁵⁾の諸本に細川屋敷等が必ず描かれているにもかかわらず、山名屋敷はいずれにおいても見いだすことができないことや、また戦国期の中央政界の第一線に山名氏が参画していない事実等から、応仁の乱後はしだいに荒廢の一途を辿っていたことも想像に難くない。

(1) 『新修 京都叢書』第三卷（光彩社、一九六八年）。

(2) 『新修 京都叢書』第六卷。

(3) 宮内庁書陵部編、吉川弘文館、一九七九年。

(4) 「立入家文書」（京都市歴史資料館写真本）。

(5) 『新修 京都叢書』第一〇巻。

(6) 『嵯川家文書之二』（大日本古文書）三〇四号文書。

(7) 小野晃嗣『日本産業發達史の研究』（法政大学出版局、一九八一年）一三〇頁。

(8) 天正四年一〇月一〇日付「諸寺勸進帳」（頂妙寺文書編纂会編『頂妙寺文書・十六本山会合用書類』四、大塚工芸社、一九八九年）。

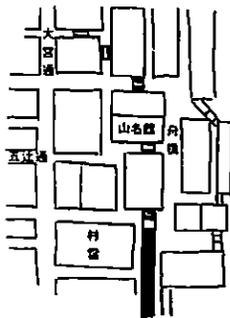
(9) この「辻子」についての近年の研究としては、高橋康夫『京都中世都市史研究』（思文閣出版、一九八三年）足利健亮『中近世都市の歴史地理』（地人書房、一九八四年）参照。

(10) 京都市編『史料 京都の歴史 7 上京区』（平凡社、一九八〇年）には、「山名町文書」の目録が収められている。

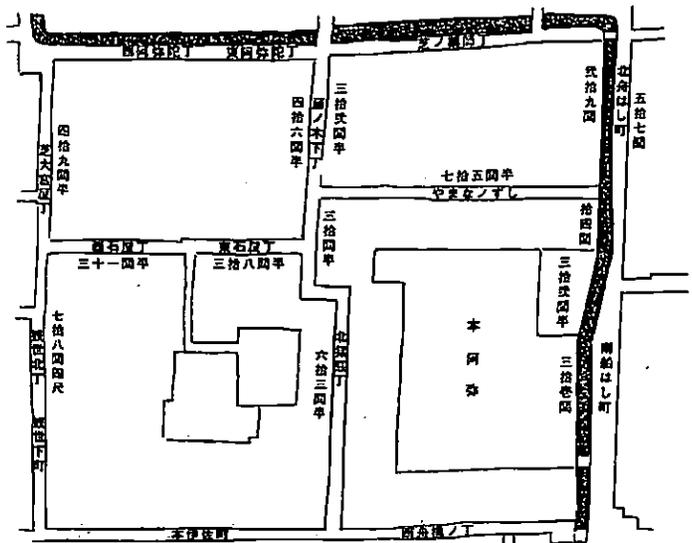
- (11) 現在、当地には、自然石に「山名宗全舊蹟」と刻まれた碑が建てられているが、地蔵盆には町中がここに集い宗全の霊を拝するという。(川嶋将生・鎌田道隆共著『京都町名ものがたり』京都新聞社、一九七九年、一三三頁参照)。
- (12) 『新訂増補故実叢書』第三八回(明治図書出版、一九五五年)。
- (13) 『新修 京都叢書』第七卷。
- (14) 『新修 京都叢書』第一四卷。
- (15) 『洛中洛外図』に関する近年の研究としては、高橋康夫『洛中洛外』(平凡社、一九八八年)、今谷明『京都・一五四七年』(平凡社、一九八八年)参照。

(かわうち まさよし・603 京都市北区小山南上総町

六三一一 シモン北大路二〇一号)



(地図二)



(地図一)

資料

兵庫・但馬の城と山名氏関係一覽

山 名 年 浩

歴史は多く人物史として語られるが、モノとの関係

で人をとらえることによつて、後世の者は立体的に歴史を把握していくことができる。時間と空間の中での人の葛藤を考えていくために、ここでは但馬国を中心とした兵庫の城において、山名氏とその家臣団がどのような軌跡をなしたのかを考える手がかりになるものをまとめておくことにした。

山名氏が但馬の城を拠点に動いた流れをさぐつていくには、どうしても次の五点が留意されざるをえない。

第一。山名氏の但馬支配の本城は、時氏公代の三開山城から、時義公以降の此隅山城へと移つていったこと。そして、これらの城を中心に家臣団の動きをみる

べきこと。

第二。「山名四天王」の太田垣氏・垣屋氏・八木氏・田結庄氏はそれぞれ名城竹田城・楽々前城・八木城・鶴城を居城とし、多くはさらに支城を築いていた。その他の家臣団である、長氏・塩治氏・宿南氏らも各々が城をもつており、但馬全域に綿密な支配体制がしかれていたことがわかる。しかし、これら有力家臣団の相互の関係は必ずしも一様ではなく、時に対抗関係が生じたことも、城の攻防をたどることによつてみるることができる。

第三。嘉吉元年の乱によつて、山名氏は南の播磨国の赤松氏の下にある城を次々と攻撃し支配を広げてい

ったことが明瞭である。

第四。応仁の乱の時期は、但馬での山名氏の動きは比較的安定したものである。

第五。天正八年の豊臣秀吉の（五万の軍による）但馬攻略は、衰退していた山名氏に壊滅的打撃を与えたことは、各城の落城の相次ぐことによつてわかる。山名氏の勢力が最後の決戦をむかえたのは水主城であった。

なお、本資料では山名氏とその家臣団の居城（一時期も含めて）関係をあげており、これに含まれていない未解明のことからも多いことをおことわりしておきます。

表中、✕は攻撃、✕は合戦、⊕は救援の関係を示し、↓は継続の明らかなもの、↕は継続を推定できるものとした。

兵庫・丹波の乱と山名氏関係一覽



山名陸奥守氏清略年譜

宮田靖國

康永三年

(1344)

是年、氏清、山名時氏を父として生まれる。

正平七年

(文和元年)

(1352)

父時氏、南朝に参仕。(山名家譜)

同八年

6月13日

父時氏、南軍の一翼を担い、京都を占領(山名家譜)

同九年

12月13日

父時氏に従い、氏清初陣す。時に十一才。(山名家譜)

同十年

2月4日

舎兄師義、神南合戦に惜敗。

同十六年

7月12日

氏清、美作に於て軍功あり。

同十七年

6月3日

氏清、備中に於て軍功あり。

12月18日

丹波篠村に於て北軍と合戦。

貞治二年

父時氏、幕府と和睦。

(1363)

同三年

4月16日

舎兄氏冬と共に氏清上洛す。

同六年

3月29日

民部少輔氏清、清涼殿の御会に参内する將軍義詮の左に帯剣の役に候す。

(中殿御会記)

6月29日

義詮、父時氏の三條油小路の第に臨む。

翌日、義満、亦之に臨む。

(師守記)

応安元年
(1368)
父時氏、舎兄氏冬と共に、民部少輔氏清、義満の元服式に参仕す。

(鹿苑院殿御元服記)

同三年
11月22日
父時氏と共に千劍破城を包围、兵糧攻めにす。

(山名家譜)

同四年

2月28日
父時氏卒す。(花營三代記)

10月17日
幕府、丹波守護山名氏清をして、稲岡

某押領する所の石田本荘一色名を吉田社に還付せしむ。

(吉田家日次記)

11月1日
幕府、山名氏清をして、中澤一族の吉田社領丹波味間二品勅旨田地頭職を押領するを禁せしむ。

(吉田家日次記)

同六年
幕府、丹波守護山名氏清をして、其部下の同國安國寺領今西村半済を押領するを止め、之を同寺雜掌に還付せしむ。

12月19日

(安國寺文書)

同七年
守護山名氏清、東寺領丹波國大山莊に

1月24日
「カヤカリノ夫」五人に十ヶ日の夫役をかける

(東寺百合文書)

永和三年
山名陸奥守氏清、父時氏の七回忌法要

(1377)
を三条大宮長福寺に修す。

(迎陽記)

2月28日
山名氏清の兵、山城國仏覺寺に至り、盗数人を捕う

(後愚昧記)

同四年
前関白、近衛道嗣、馬を山名氏清に贈る。(後愚昧記)

12月17日
幕府、山名義理を紀伊守護と為し、山

名氏清を和泉守護と為す。是夜、義理、

12月20日

康曆元年 (1379)	1月22日	義満、和泉国土丸城に拠る橋本正督を、山名義理、同氏清、同時義をして之を攻めしむ (花營三代記)
	1月23日	橋本正尹ら五十余人討死する。城落る。 (南朝編年記略)
	7月25日	義満の大将拝賀に、侍所頭人山名民部少輔氏清、隨兵百騎を召具す (愚管記)
同二年	7月17日	丹波兼和泉守護、山名氏清、橋本正督の拠る土丸城を抜き、正督以下十一人の首を京都に伝う (花營三代記)
	8月23日	紀伊の須田一族等、山名氏清の軍に敗れ、潰散す (花營三代記)

	9月7日	山名氏清、紀伊の生地城を陥る。 (花營三代記)
	12月22日	幕府管領斯波義將、義満の命により、丹波國東寺領、大山莊領家職田島參拾町の内、五町を押領する中澤を止め、東寺に還付すべく山名陸奥守に命ず (室町幕府御教書案)
永徳元年 (1381)	1月24日	山名氏清、大軍を以て泉州土丸城を囲む。和田正武病みて男正利、正次防戦す。然と雖も城落ち、神宮寺師綱、福塚忠貞等討死 (南朝編年記略)
	1月25日	山名氏清土丸城入城 (南朝編年記略)
	9月9日	和泉守護山名氏清入京す (後愚昧記)
同二年	閏1月24日	山名氏清、楠木正儀と河内國平尾莊に戦い、之を破る。

同年春

(三刀屋文書)

山名氏清、河内、和泉、摂津を取り、勢大いに振う

(大日本史)

8月6日

幕府、再度、山名陸奥守氏清をして、中澤の東寺領押領を禁ぜしむ

(室町幕府御教書)

同三年

7月25日

幕府、三度御教書を山名陸奥守に発し、「不日止地頭中澤五郎左衛門入道以下輩押領、可被沙汰付雜掌。更不可有緩怠儀之状、依仰執達如件」と嚴命。

(室町幕府御教書)

8月某日

山名氏清、丹波勢一千五百騎を率いて、播磨國清水寺に楯籠る赤松氏範を攻む。後、細川勢と交代。

(赤松旧記)

至徳二年

(1385)

幕府、山名氏清を山城國守護となす。氏清この日入部する

12月3日

(後鑑)

嘉慶二年

(1388)

3月16日

楠正勝、舎弟正元、和田正利、同正秀、河内國平尾莊に兵を挙ぐ。和泉守護山名氏清、河内守護畠山基國を援けて之と合戦す

(南朝編年記略)

3月17日

南軍、恩地満正、貴志、崎山等討死して敗れ、千劍破城に退く

(南朝編年記略)

康応三年

(1390)

3月17日

義満、山名氏清、同満幸をして、但馬の山名時熙、氏之兄弟を討たしむ

(明德記)

明德元年

(1390)

9月17日

山名民部少輔氏清、但馬國一宮出石神社に禁制を下す

(出石神社文書)

是年

10月某日

山名陸奥守氏清を但馬國守護となす

12月30日

氏漕の先陣、山名上総介高義、大内義弘と二条大宮に戦い、中御門大宮に敗死。その将小林上野守義繁も討死。

(常楽記)

山名満幸は細川頼之・畠山基國と内野に戦う。土屋党五十余人討死を初め、大勢討死して満幸敗走す(得田文書) 山名氏漕・同氏家は赤松義則と二条猪熊に戦う。後、氏漕と猶子氏義は一色詮範と押小路大宮に戦い討死す。氏家は遁走す(康富記)

明德三年
(1392)

1月4日

山城國は畠山基國へ、丹波國は細川頼元へ、丹後國は一色満範へ、美作國は赤松義則へ、和泉國と紀伊國は大内義弘へ、出雲國と隱岐國は佐々木高詮へ。但馬國は山名時熙へ、伯耆國は山名氏

之へ。因幡國のみ山名氏家を宥免して本領安堵した。若狭國今富庄(小浜の事)は一色詮範が拝領す。

かくて、明德の乱の前年に山名時熙が失い、細川頼之に与えられた備後國を数えれば、実に九ヶ國が失落したのである。つまり山名氏は六分の一衆、十一ヶ國を領有す、と言われているが、明德の乱の一年前までは、十二ヶ國半も領していたのである。

ところで、義満側について時熙を氏漕が憎んでいたように言う人がいるが、それは事実でないと思う。時熙は氏漕のかわいい娘婿であるから、義満の命令とは言え、討伐した事を悔いていたであろう。だからこそ、その直前に氏漕は義満に対して、

「一家の者共退治の事、偏に當家衰微の基也。雖然上意として仰下さる、上は辞し申すに所なし。いそぎ馳下て治罰仕候べし。但し彼等難儀に及ばず、定て歎申す事も候べし。其時御免あるべきにて候者、氏漕下

向以前に教訓を加え、めしのぼせ候べし。」と、時熙と氏之の宥免を願ひ出ているのである。しかし、義満の本心は山名潰しにあつたのだから、それは空しい願いであつた。又、翌年氏清と義満の決戦が避けられぬと判明した時、尚、和睦を主張する武将に対し、義満は、「今度の彼等が企またく訴訟などの為にはあらず、只天下に心をかけたる物也。それを冤角なだめつくろはゞ、還て御方たばかられぬと存ずる也。此題目はとも一度やぶれずんば静謐すべからず。遅速こそあらんずれ、只同事なるべし。然者當家の運と山名一家の運とを天の照覧に任すべし」

と、天下分け目の戦いを望んだのである。義満は氏清が天下を取ろうとしているのだと断定しているが、氏清にしてみれば、前年に時熙の備後國を奪われ、今又満幸の出雲國を失つた。一家の衰微の基であり、義満の狙いが山名潰しにあると、氏清は看破したのであらう。

そこで時熙と氏之の去就であるが、彼らが義満に属

した事は却つて氏清を安堵させたのではなからうか。なぜなら、もし時熙も氏之も氏清に同心していたならば、敗戦の時には山名の名籍が消滅する事は必定だったからである。時熙が一蓮托生と言つてくれるより、將軍側にある事で、氏清は後顧の憂い無く存分に戦う事ができ、満足したのではないかと思つている。保元の乱以来、親子兄弟、骨肉相喰むは清和源氏の源氏たる所以である。など嘆く事やある、である。

とは言い余、氏清の時運沿革を一覧すれば、如何での感を拭えない御仁もいらつしやるであらう。

なんとなれば、氏清は二代將軍義詮の太刀持ちをしたり、前関白近衛道嗣から馬を賜られたりするほど信用されていたからである。又、氏清の妻は持明院保脩の女であり、管領細川頼之の妻とは従姉妹であり、しかも頼之の妻は「荒唐」応永三年五月十日の条によれば、義満の乳母であつた。

しかるに、なぜ義満に叛くのか、と訝られるかもしれない。しかし、狡免死して良狗烹らる、と言われる

ように南軍が逼塞すると、強大化した山名家を取り潰そうと謀ったのは義満の方である。時熙兄弟謀叛の件も、満幸の横田庄横領も、義満か又は頼之の陰謀である。詳細は割愛するが、要するに氏清は韓信のように行動する事を潔しとしなかったのである。

氏清にとつて南朝に帰順する事は、妻の手前があるとはいえ、あまり違和感は無かつたであろう。なぜなら、父に従い九才から二十才までの多感な青春時代を、南朝の錦旗の下で戦つていたからである。再び南朝へ帰参する事は古巣へ戻るような感じがした事であろう。

つまり氏清の場合、変節や無節操の批判は当たらない。それを言うなら楠木正儀や、足利尊氏、直義、細川清氏こそ非難されて然るべきである。正儀は元來北朝に仕えた事もないのに北朝に降り、尊氏、直義、清氏は自分の都合で南朝に降参している。大体、当時の人々には、江戸時代のような儒教的思想は無かつたのである。それが証拠に、観応三（文和元）年閏二月二十二日、北朝の光厳法皇、光明上皇、崇光天皇と東宮直仁

親王が南軍に拉致され（その後五年間、賀名生に幽閉され）ると、北朝の公家達は、関白太政大臣二条良基以下ほとんどが南朝に帰順してしまつた。この一事を以てしても、明德乱の氏清原因説は正鵠を射た意見ではない。

ところで、氏清が山名家の棟梁であつたか、という問題があるが、形式上は非で、実力上は是であろう。系統から言えば、師義の養子となつた時義が氏の長者で、侍所頭人に三度も就任している。氏清は一度である。しかし、父時氏や將軍の信頼となれば氏清に軍配が上がる。それは、家玉である犬追物の秘巻「篠葉集」に、時義が所望したのに父は氏清に与えた、と書かれているからである。又、將軍の太刀持ちなどと言うのは余程信用されなければ勤まらない。それに、前関白近衛道嗣が氏清にだけ馬を贈つている。この時、義理時義も同じく出陣しているのに、である。太閤は他の二人より氏清に勝利を期待した、と私は解釈する。ある人は、近衛道嗣は前関白であつて現関白ではない。

故に、この事と関係はなく、たゞ氏清が近衛家領宮田庄に居城を築いていたから、何かの札が偶然重なったに過ぎない、と言う人がいる。しかし、この時の橋本正督の拳兵は、京師を震撼させ、近衛公が馬を贈った二日前に、義満は東寺に陣し、後円融天皇は騷擾に困りて六篠殿行幸を停め給うたぐらいだから、道嗣は、御宸襟を慮つての事であろう。なんとすれば、近衛道嗣は滅多に贈物をしない人だからである。

しかし、時義の亡くなった後は名実共に棟梁であつたかもしれない。つまり、時義の継嗣が時熙であれ、満幸であれ、兩人とも氏清にとっては甥にして婿である。その上領國は山城國を初めとして畿内又はその周辺であり、時熙や満幸の領國は畿内にはなく地方である。しかし、血統的には満幸が師義の直系であり、義幸の代言とは言え、本当は正統の棟梁だったのでなからうか。だからこそ氏清も満幸の言に従つたのだと私は思っている。

それはさておき、氏清の一周忌法要は義満が営んだ。

そして首級はこの時葬られ、後に経王堂が北野天満宮に建立された時、その首塚が良礎となつた。又、三回忌は、おそらく宗鑑寺で行われたのであろう。つまり、善応寺正範禪師が氏清の母に進上した遺骨は、その孫娘、即ち氏清の娘であり時熙の妻であつた安栖無染に託され、宗鑑寺に埋葬された、と私は推理している。

宗鑑寺建立の年が元中九年（一三九二）であり、氏清没年の一年後である故をもつて、氏清菩提寺を否定し、あまつさえ、山名氏の開基をも否定する輩には、もはや何をか言んや、である。後身の宗鏡寺はいざ知らず、宗鑑寺は安栖無染ひいては時熙公が岳父氏清の追善供養に建立されたと断言しても、中らずと雖も遠からずであらう。なぜなら、三十三回忌が、安栖無染によつて、五山最高の地位を歴任した惟肖得嚴を導師として南禅寺に於て修されたのであるから。

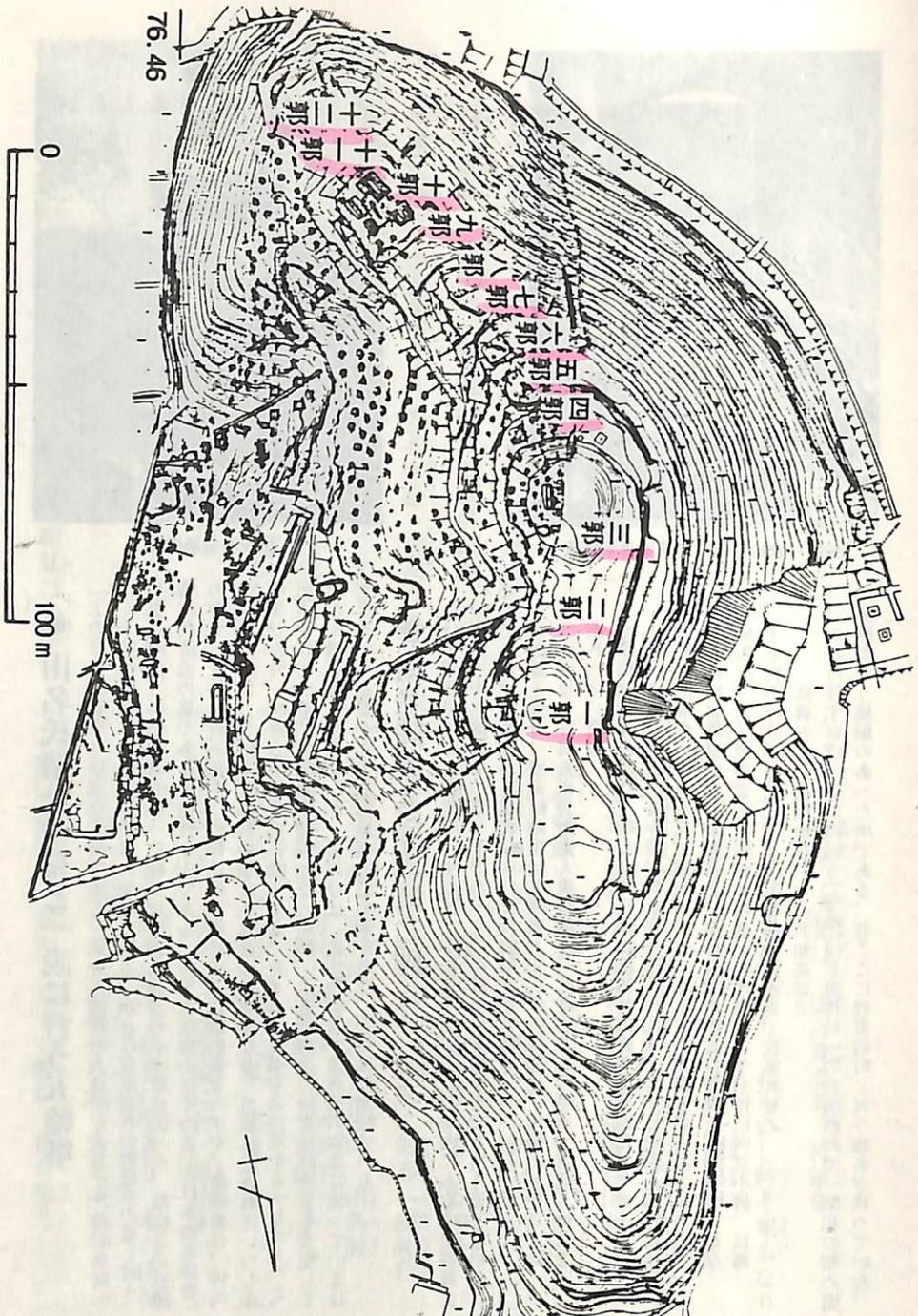
ちなみに天満宮境内の東向観音にある大いなる五輪石塔は、やはり吉田東伍博士の主張されたように氏清の墓だと思ふ。確かに石そのものは江戸時代の作りで、

山名知高公の再建であろう。だが、これを忌明塔と言っている事は、古文書の「十月五日から十四日まで毎日一千人の僧が読誦し、十五日を忌明と称して一般庶民に開放した」と言う記録と一致する。しかし、これは菅原道真公の御母堂の墓とされてしまったので、今となつては如何ともしがたい。たゞ、人知れず参詣するのみである。

ついでに、氏清が最初の領国丹波で築いた宮田城の事に触れておきたい。名称は近衛家領宮田庄に由来するが、あまりに広大な城域であつたので、今では板井城や内場山城などと別個の城であつたかのように言われているのが残念である。眼下に山陰道が東西に走り、京師と但馬を結んでいる。又、すぐ南には篠山川が流れ、これに沿つた道を行けば播磨へ出る。逆に播磨から廻行すれば丹波に入る。父時氏が文和三年十二月十三日伯耆國を立ち、但馬國より杉原越えに播磨へ打出、しかる後、丹波へ押入り仁木頼章を討つたのはこの道だつたのではなからうか。だからこそ時氏は氏清

に城をこの地に築かせたのである。つまり、宮田城は交通の要衝に在つたのである。又、その広大さは天満宮の位置によつて知ることができるのではなからうか。もとからあつた天満宮もあるではあろうが、板井城跡の北端にある天満宮には、応永十八年と書かれた木鉢があると言う。応永十六年九月五日に山名左近大夫将監入道調心が四代將軍義持から宮田庄を宛行われたのであるから、当人か、又は宮田大藏丞時廣の勸請であろう。それは氏清の御霊を以て城の守護神としたのであろう。天満宮は菅原道真公が祭神ではないか、と反論する人もあるではあろうが、理由は長くなるので割愛する。

板井城については、白玉楼中の人となられた西田順次先生の研究もあり、又、西田家には氏清公より拝領の大きいなる茶釜が伝えられているので、それは県教育委員会刊「兵庫県の中世城館」に譲つて、同教育委員会編の「兵庫県埋蔵文化財調査年報」の内場山城をコピーして転載する。それには、「存続年代は15世紀後半から16世紀前半と考える」とある。





知高(矩豊)公建立の氏清公頌徳碑



伝氏清公忌明塔

●山名氏清公の墓と一説に言う五輪塔

上の写真の石塔は巨大なものである。北野天満宮の大鳥居を入れて次の石鳥居へ行く手前の左側にある東向観音の境内にある。現在は菅原道真公御母堂の墓と言う。しかし明治三年に廃寺となった経王堂は東向観音のすぐ隣にあった。故にこの五輪塔は氏清公の墓である可能性が大である。吉田東伍博士はその著「大日本地名辞書」の中で、北野神社の項に、「按に此石塔は山名氏清の墓ならずや。碩磔集日、竹内法親王の仰に、北野経堂の良の礎は山名氏清の墳墓なり、乱世にまぎれていつしか唱失ひたり、内野合戦の後此に経王堂建てたまへば其墓も之に近かるべし云々」と、記述されている。経王堂が廃寺となった時、山名知高公の碑文は経王堂を支配していた大報恩寺へ移されたが、墓だけは、氏清公御霊が道真公の御霊に從っているはずだという思想から天満宮境内に留め置かれた、と私は推測している。

●山名陸奥太守氏清之碑

今は天満宮近くの大報恩寺(上京区七本松通今出川上ル)境内にある。京都最大の堂宇(三十三間堂の二倍半)であった元の経王堂を縮小したと言う太子堂の前に建っている。左側面から裏面にかけて次の碑文がある。

北野経王堂者 鹿苑院殿爲山名陸奥太守氏清所經營也、氏清山名伊豆守時氏四男也、其爲人也膂力過人勇猛絶倫、此時山名一族領十一箇國、世謂之山名六分一殿也

南帝賜錦御旗於氏清、明德二年氏清進御旗於内野奮擊而戰死、年四十八、法號古鑑衡公、號宗鑑寺殿、將軍家使諸將拜氏清之首、且頌寫八軸妙典轉讀萬部法華矣、爾來每歲例爲定式傳道、經王堂之良礎者葬氏清之封塋也、山名親族家僕過此堂則鞠躬拜之、然慶長中再興之日移經王堂於今地、故堂城失所、且又頌年堂宇朽壞舊跡僅遺、嗚呼痛哉、予不得已而立小碑、以傳于永世不持欲顯揚先德、且傷靈魄不獲其安也、我黨其思之

延寶五丁巳歲仲秋日

山名知高誌之

一つだけ註すれば、ここに言う「今地」は北野神社一の鳥居西側で、昭和の初め頃、尾張屋という旅館のあった所である。昔ここに経堂前町と言う地名が残っていた。

(安積監物行秀追悼供養作品)

作詞／ごとうとしのお
補詞／藤 純 好雄
音頭／東 秀月
囃／播州段文音頭保存会

「播州木ノ山城・落城の譜」

- 一、播州竜野 木の山のこ、城跡に 佇めば
残月淡き 松風に 遠き昔が よみがえる
- 二、播磨の国の 守護職で その名赤松 満祐の
悲運をたどる 古戦場 その戦の はじまりは
- 三、主君の仇 討つべしと 遙か下総 結城城
関八州の 豪族が 幕府相手に 立ち上る
- 四、専横きわむ 足利の 六代將軍 義教は
幕府の軍を 差し向けて 結城の軍を 討ち果たす
- 五、戦場酔ひし 都なる 赤松邸の 祝宴に
招かれ来たるが 運のつき 嘉吉元年 初夏のこと

- 六、招く赤松 満祐は 恨み重なる 將軍を
消すはこの時かねてより ねらいし時ぞ来るなり
- 七、右手を制す 左馬助 左手庄え 則尚が
かまえてお恨み なさるまじ 安積監物 首刎ねる
- 八、祝の宴 忽ちに 上を下えの 修羅と化す
赤松勢は 意を果し 兵をまとめて 京を出る
- 九、安積監物 行秀は 首を穂先に 播磨路へ
威儀を正して 満祐は 首を納める 安国寺
- 十、知るや知らずや 下剋上 播磨に販る 満祐に
攻める軍勢 数万騎 中にも但馬の 山名勢
- 十一、防備の陣は 蟹坂 生野峠や 三草山
三石峠に 美作路 敵は大軍 手はうすく
- 十二、味方は敗れ 散々に 坂本城にと 集結す
満祐こゝで 思うには 祖父の築きし 木の山城
- 十三、一族集め 再びの 決戦せむと 意を決す
後に赤松 一族の 八十七騎が 寄り集う

四、ひたひた困む 山名勢 眼下に見おろす 二万余騎

勝つも負けるも 時の運 必勝祈願の 神仏

五、困む山名は 一勢に 揖保川渡り 攻め寄せ

時は九月の 十日朝 木の山城に 火が揚る

六、落城悲劇の 武将には 網干竜門 直操や

義雅親子 則友や 依藤豊房 数知れず

七、満祐天罰 到れりと 因果を含め 則繁や

吾が子教康 則尚に 木の山城を 逃れさす

八、南無八幡や 大菩薩 遙か浄土に 手を合わし

六十九人と 切腹す 介錯するは 安積なり

九、安積監物 思ふには こゝで死するは 易きこと

我も赤松 部将なり 最後は目にも 見せんとぞ

一〇、城の櫓に 火をかけて 小桜威の 鎧着て

山名の軍に 大音声 我と思わん 者は奇れ

一一、山名の強者 影安の 放てる矢もて 監物の

大薙刀の 柄を落す 阿修羅の如き 監物は

三、山名の軍に 斬つて入る 山名の部将 影安と

組んで合せる 小半刻 遂に影安 討つてとる

三、城に戻りて 集めれば 味方は僅か 百余人

城脱出を 命じつ、 南無や西方 浄土向き

四、合せる手にて 腹を切り 腹わた掴み これ見よと

山名の兵に 投げつける 大塚安積 尚死なす

五、満祐自決の 場所に寄り 更に火をかけ 自らの

とどめを刺して 焼け死ねり げに豪雄の 最後なり

六、則祐築く 木の山城 白旗城に 次ぐ城と

不落を誇りし 城郭も 遂に無惨に 焼け果てる

七、あゝ、うたかたは世のならい 魂魄こゝに 留まりて

秋風すさぶ 城の跡 尋ねし人の 胸ぞ打つ

八、時の城主の 義雅の 一子千代丸 たゞ一人

近江の国に 落ち延びて 生れしその子 法師丸

九、これぞ本家の 政則で 置塩城に 居を構え

播備作をば 回復し 左京大夫に 昇進す

三、まさに嘉吉の乱こそは 上と争う 風潮を

広め群雄 割拠する 治乱興亡 限りなし

三、やがて迎える 応仁の乱に乗じる 武將たち

武田上杉 織田毛利 戦国時代の幕があく

三、竜野の里は 恩徳寺 さいれん坊主の 祭こそ

赤松一門 供養する 雨乞い祭の 由来なり

三、豪雄 安積監物の 面影偲び た、えたり

播州音頭の 一節で 供養も深き 盆踊り

○ 依藤豊房は、よりふじと説むのが正当ですが、
膳呂の都合で、えとうとしました。

○ 主に嘉吉物語から採材しました。

本稿は姫路の山名保氏（山名氏一族会常任理事）が提供くださいました。

※さいれん坊主

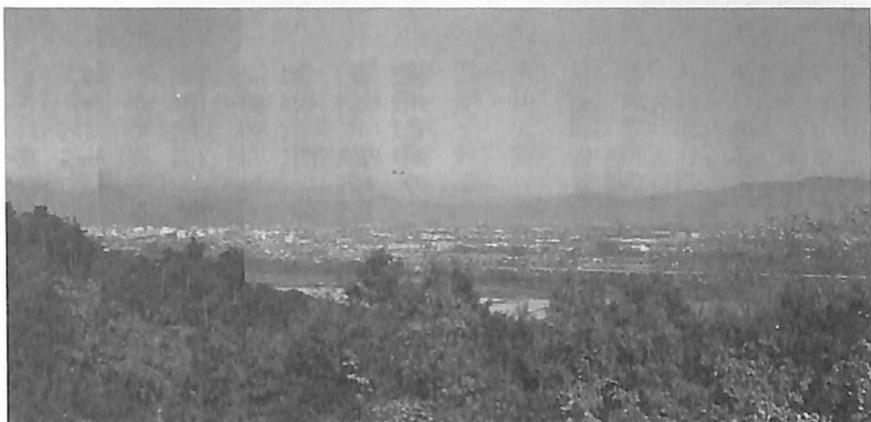
「さいれん坊主」は、嘉吉の乱に城山城で討死した赤松満祐一族の霊を菩提するために、古くから行なわれてきた孟蘭盆の火祭であるが、表だつたことが出来なために、「雨乞い」と唱えて隠れ供養をしたのが始まりと伝えられている。

恩徳寺旧記に「この寺は古くより氏子持の寺なり。昔より毎年十二ヶ村より祭礼として、七月十五日、十六日の両夜ほうでん踊りとて、灯笼旗を持ち、かね太鼓をたたき、日暮れに村々より群衆来りて相勧める」とある。竹さおの先に、丸い形に似た灯ろうをつけて、中にろうそくを立てて明りをつけて、夕暮れが近づくころ、子供たちは、これを押して立てて恩徳寺に集まり、大人がたたくかね太鼓の調子に合わせて、エンヤ、エンヤと声をかけて、観音堂の前で輪をつくるようにして駆け廻るのである。夜空に流れるように円舞するさいれん坊主の明かりは、丁度、城山城の霊魂が土地の人々の情け深い供養に、群がり集まってくるかの如く、なんとも言えぬ感動がわくのである。

「中垣内沿革誌」竜野市中垣内自治会編

八瀬孝先生に提供の同誌より抄録させていただきました。

（編集部）



山名城より 上州平野をのぞむ

山名城址と山名八幡宮

吉 川 広 昭

(全国山名氏一族会事務局)

昨年十一月十二日、宿願の山名城址に立った私は、眼前にくり拡げられた上毛の雄大な風光

に思わず息をのんだ。

東北にどっしり鎮まる巨峰が赤城山か。

その裾野がゆるやかに関東平野へと融けこむあたりが足利市・大田市だろう。目を転じると高崎・里見のあたりまで見はるかすことができるが、言うまでもなく、この広大な天地こそわが国中世史という晴れの舞台に踊り出た新田・足利・山名・里見・徳川等、いわゆる清和源氏搖籃の地である。

山名城——。新田宗家から新たに一家を興した山名義範公が一族の本城として構築されたという。高崎の市街から南方5kmほどのところに、標高100mもあろうか、東西に延びるゆるやかな丘陵があるが、その東端の頂上に設けられたのがこの城である。尤も現在では建築物など残っていないようはずもなく、全山赤松と櫟な

どの落葉樹や葛かずらに覆われてはいるが地形の起伏は明らかに郭や塚・堀割・土居などの旧状を示してく
れる。

城地の規模は東西四五〇m南北一三〇mとか。本丸と二の丸を核として、東西の鞍部を削平した郭跡が数か所連なり、それぞれが互いに独立と連繫を考慮した配置になっていて中世山城の特色を遺憾なく發揮している。

二の丸といわれる址には「山名城址」と刻まれた記念碑や説明板・ベンチなどがあって、見学・ハイキングの便に供される。

峰つづき西北方の根小屋城・寺尾城は義範公の父義重公の築城というから、この辺一帯もやはり新田氏の勢力圏であり、山名城は新田領西辺の守備として義範公に托されたことを物語っている。

山城から東へゆるやかに続く小道（高崎自然歩道）を1km程降った山麓に山名八幡宮が鎮座している。

社伝によれば、安元年中（平家全盛の頃）に山名氏

太祖義範公が宇佐八幡宮を勧請し、一族の氏神として社殿を創建されたという。古図を拝見すると、広大な社域に大小の社殿が建ち並んでいるが、現在でも莊重な御本殿や拝殿をはじめ、隨身門・氏子参集殿等が処を得た配置を見せている。

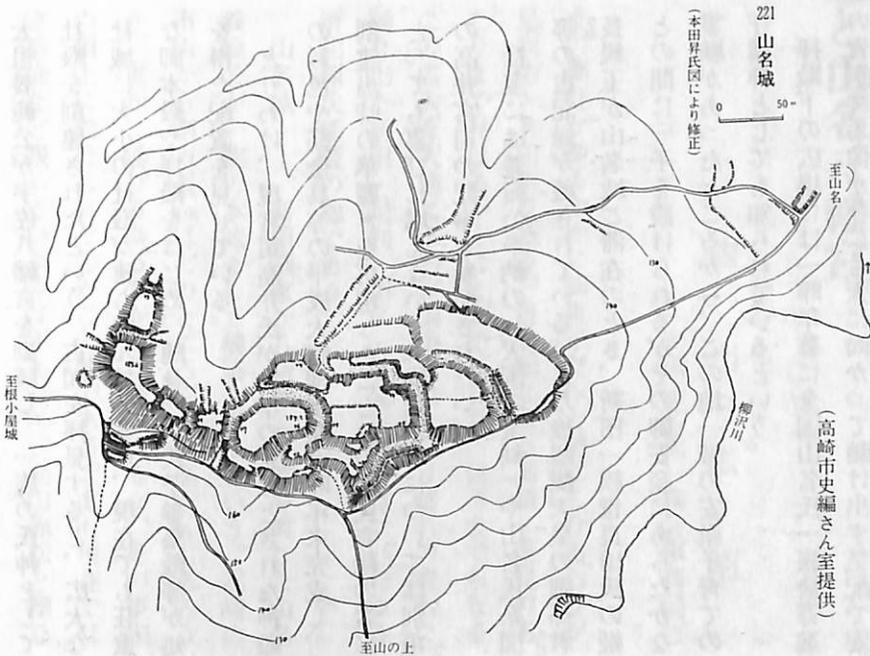
とりわけ、現宮司高井氏が多年の念願とされた神殿の彩色や鋳金具等の平成大修理事業が昨年末完成し、創建当時の華麗さを再現したことは山名氏有縁の者にとっても喜びに堪えない。（修復工事については別項の高井宮司の記事を参照されたい）

社宝には義範公奉納の「天国の宝剣」や山名氏系図等の古記録が蔵されている。また後醍醐天皇の御孫君長親王が山名城ご滞在のとき、新田一族世良田氏の姫との間に一子を設けられるがその御安産にあらたかな靈験があったところから、この地一帯の安産子育ての守護神としても知られているという。

拝殿下の広場には一昨年暮に全国山名氏一族会寄進の青銅神馬像が今にも天に向かって馳け出す気配で安

置されているが、いかにも武神としての当社にふさわしい風格をただよわせている。

付記 この山名城址探訪については、高崎市史編纂室の行き届いたご配慮と同岡田昭先生直々のご案内などで、未知の土地ながら短時間に効果的な見学ができました。誌上を借りてあつく御礼申しあげます。



(高崎市史編さん室提供)

末裔登場

山名氏の部

○ご寄稿文章の長短や紙面紙数の都合から、予告しましたような掲載スペースがとれませんでしたことをお詫びいたします。
 ○掲載文はなるべく原稿に忠実となるよう心がけましたが、ときに改めさせていただきました。あしからずお許しねがいます。

- ①氏名 ②現住所 ③本貫 ④家系 ⑤所感・メッセージ ⑥家紋



① 山名晴彦（七才）

② 小金井市貫井南町三二〇一六

〇四三三八一―三四一二

③ 但馬国村岡（村岡藩主山名家第十四世）

村岡山名氏①

④ 源義範……時氏―時義―時灝―持豊―教豊―政豊―致豊―豊国
 ―豊政―矩豊―隆豊―豊就―豊暉―義徳―義方―義蕃―義問
 ―義濟―義路―義鶴―晴彦

⑤ 太祖以来八百年の伝統を踏まえ、廿一世紀をいかに生きるか、皆様とともに考えたいとねがっています。

⑥ 五七桐に七葉根笹 丸に二引両旗差物）五七桐（女子紋）



① 山名武男（七九才）

② 東京都江東区永代三二一

〇三一三六四一―〇三九〇

③ 但馬国出石（但馬山名氏嫡流）

但馬山名氏

④ 義範……時氏―時義―時灝―持豊（宗全）―教豊―政豊―致豊
 ―誠豊 旗本山名氏① 祐豊 堯政 恒豊 豊頼 豊常 豊明 豊實 如風
 ―頼福 豊教 豊武 豊政 豊吉 武男

⑤ 江戸幕府瓦解以降音信が絶えていた一族が再び相見える機会を得、欣快に存じます。相ともに先祖顕彰に励みましよう。

⑥ 五七桐に七葉根笹 丸に二引両



以降、
会員紹介のページに付き、
中略

山名氏関係名簿

現在「山名氏」と称される方は全国で二千五百軒いらつしやいます。他姓にかわられた方を合わせると、おそらく万余の大集団になることでしょうが、ここでは全国山名氏一族会ご入会の会員・会友のみを掲載させていただきました。

(山名氏関係社寺)

山名八幡宮 千三七〇
高崎市山名町一五一〇

山名氏太祖義範公勸請の社

壺井八幡宮 千五八三
羽曳野市壺井六〇五―二

源義家公等河内源氏の氏神

多田神社 千六六六、〇一
川西市多田院

源満仲公等多田源氏の氏神

大本山南禅寺 千六〇六
塔頭 真乘院 京都市左京区南禅寺福地町

山名宗全公御廟所

大本山妙心寺 千六一六
塔頭 東林院 京都市右京区妙心寺町

村岡山名氏豊国公御廟所

大明寺 千六七九、二三二
兵庫県朝来郡生野町黒川

山名時熙公開基の禅刹

以降、
会員紹介のページに付き、
中略

円通寺

千六九六〇一
兵庫県城崎郡竹野町須谷

山名時義・時熙公御廟所

宗鏡寺

千六八〇二一
兵庫県出石郡出石町出石

山名氏清公菩提所・沢庵禪師隠棲の寺

総持寺

千六八〇二一
兵庫県出石郡出石町宮内

但馬山名氏祈願寺

楞嚴寺

千六九一六七
兵庫県美方郡浜坂町田井

但馬山名氏祈願寺

長福寺

千六一五
京都市右京区梅津中村町

宗全公茶毘所

法雲寺

千六六七一三
兵庫県美方郡村岡町村岡

山名氏太祖以降現在にいたる総菩提寺

永福寺

千三七〇
群馬県高崎市寺尾

新田義重公御廟所

この外にも山名氏有縁の社寺は多く現存し、古文書・遺品等が伝承されているが、次号以降に紹介したい。

あとがき

◎ 前号からのお約束どおり今号は山名氏の方々にご登場
ねがいました。ご寄稿も山名氏関係のものが多くなつて
てしまいました。両氏研究の名にささか反する？

◎ 赤松氏側の有志にも勿論お願いしたのですが、ご執筆
いただけなかったことは、編集子の怠慢でもあります。
お詫びしますとともに、次号を期したいと存じます。

◎ そうした中で「異説・美作後南朝」はまさに異彩を放
つ一文ではないでしょうか。有田先生は赤松氏の本拠で
ある播州赤穂上郡かほこりの好学の士と承っております。ご述作
の「ふるさとシリーズ」からこの一篇を転載させていた
だきました。

◎ 美作といえは、山名赤松両氏にとつて確執の絶えな
かつた国です。しかもそこに存在していた「後南朝」には
両氏ともに深いかわりをもっていたとは、その「後南
朝」が元禄時代まで続いていたとは、早速には作東町を
訪ねたい思いでいっぱいです。

◎ 今一つ。播州音頭の「城山城落城の譜」です。播州の
各地では、それぞれのところの故事を音頭に仕組んで語

り継ぐ伝統が今でも盛んで、いろんな新曲（詞）が発表
されていますが、こうしたかたちで人口に膾炙してこそ
血のかよった歴史観が育つてゆくのでしょう。ご提供の
山名保棟、ほんとうにありがとうございます。

◎ 今年の山名氏一族会総会は六月六・七の両日に群馬県
高崎市の山名八幡宮で行ないます。同地は山名氏発祥の
地だけに感銘もひとしおでありましょう。付近には新田
・足利・里見・徳川など清和源氏、新田氏族の遺跡が多
く残っていますので、できるだけたくさん探訪したいと
考えています。ご参加できないお方には事後報告をさし
あげますから折をみてお訪ねください。

◎ 里見氏といえはご末裔に中曾根康弘先生がいらつしゃ
います。政務ご多端の御身ですが、この総会にはご臨席
のうえ、同族の誼を深めてくださいますはずです。謹ん
で先生のご懇情を拝謝申しますとともに、ご周旋の労を
たまわりました山名八幡宮宮司様・上信電鉄社長様方に
深謝すること千万でございます。

◎ 赤松宝林寺様の県重文赤松三尊像保存のご計画が着々
と進展し立派な収蔵庫が完成することを祈念いたします。

山名氏
赤松氏 研究ノ一ト 第3号

平成四年五月三十一日発行

編集・発行

山名
赤松 両氏顕彰会

兵庫県美方郡村岡町村岡

山名寺内

事務局(吉川 広昭)

〇七九六九一八一―二五二

印刷
榑谷本紙業

兵庫県城崎郡日高町江原

